HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アリストテレスの心身論のパズルと質料形相論
Author(s)	千葉, 恵
Citation	北海道大學文學部紀要, 44(3), 7-40
Issue Date	1996-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33668
Type	departmental bulletin paper
File Information	44(3)_PL7-40.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学部紀要 44-3 (1996)

アリストテレスの心身論のパズルと質料形相論

千葉　恵

「存在するものの真理を探求する際、かの人たちは存在するものはただ感覚的なものとだけ考えていた」(*Met.* IV.5. 1010 a 1-3)

序

アリストテレスの質料形相論を心身論の文脈で論じ理解すること，これが近年の顕著な傾向である。この試みにより，一方では心身の視点からこの伝統的な存在論に新たな問題が提起され，内実豊かな理解の可能性が開かれている。他方，現代の心身論に対し彼の質料形相論が許す多様な解釈に基づいて，単なる唯物論や二元論とも異なる中間の立場を展開する可能性が開かれ，それ自身として興味深い企てになっている。

しかし，これは端的に言えば，アリストテレスにおいては生命またその活動の研究である生物学や心理学という個別科学からの質料形相論の試みである。それは，プラトン等の形而上学の構築において明らかになった諸難問解決の模索のなかで生まれた質料形相論に対し，一面的なアプローチになる恐れは否めない。本稿では，アリストテレスは先行哲学者たちが陥ったアポリアを自らの課題とし，それをどう乗り越えているかという企てとの関連で，彼に帰せられる一つの心身論のパズルを手がかりに，彼の質料形相論が持つ特質を探る。このパズルは研究者たちにより彼の心身論から質料形相論を理解しようとする際にアリストテレスの理論の問題として提示されたものであ

る。一般的に言えば可能態と現実態は質料と形相に対しどのような関係にあるのかがそのパズルにおいて問われている。本稿において，彼の質料形相論が，可能的なものが現実的となる生成世界の存在論の課題解明の手法として，思弁的な一般存在論と生成変化する自然の探求実践を通しての知見の二つのアプローチを相互補完的に総合していることを明らかにしたい。存在論のレヴェルで原理として，また具体的な個別科学のレヴェルで複層的に質料，形相が論じられる文脈を読み解く時，彼に帰せられる心身論のパズルを解決することができ，彼の存在論をよりよく理解する手がかりが得られると思われる。

尚，アリストテレスの質料形相論の理解を促す一つの対立軸は，質料そして形相は全合成体（σύνολος）の統一性に対しいかなる関係にあるかの解釈をめぐって立てられる。一方では，全合成体の統一性はその根拠をもはや分析することのできない基礎的なものとして自明であり，それを構成する質料と形相はその全合成体との関係においてのみひとつの抽象作用により特定可能であるとされる。他方では，質料，形相のそれぞれ或いは少なくともひとつは統一的な全合成体の概念とは独立に特定され，質料と形相の結合の原理はそれらが統一的な全合成体における要素であるということへの言及なしに陳述可能であるとする。この立場は質料ないし形相の自己同一性を前提としている。(1) 本稿はアリストテレスの質料形相論理解の根本に横たわるこれら二つの立場を調停する視点を提供することをめざしている。

1

まず，心身の質料形相論による理解の問題点として研究者のあいだで議論されているひとつのパズルを提示する。それは「霊魂論」II 1 の霊魂の定義と「形而上学」VII 10，11 等の同名異義原理の二つの論述を重ねる時に生じるとされる。霊魂の定義は植物，動物そして人間にも対応する「最も共通な説明」を探る文脈で与えられる。(412 a 5) 霊魂は一般的に「可能的に生命を持つ自

然的物体（σῶμα）の形相としてある実体」（412 a 20）や「自然的器官的物体（σῶμα）の第一の現実態」（412 b 5）と定義される。尚ここで物体は「基体即ち質料」と同定されている。（412 a 19）つまり，霊魂は質料である器官を持った物体ないし身体の形相或いは第一の現実態である。他方，同名異義原理は，質料形相の全合成体の部分である手や指は質料として理解されるが，部分は全体から離されては存在しえない関係にあり，切断され「死んだ指」は同名異義的にでなければ，もはや「生物の指」とは呼ばれないという主張である。（1035 b 23-25）器官は，その定義上，或る機能を遂行することのできる何物かであり，もしその能力を失えば，もはやその器官ではありえない。（1036 b 31）そうであるとすれば，生きている身体としか語り得ないものを，質料として，形相である霊魂から区別することになるのではないか，身体は「形相づけられた質料」としてしか存在できないのではないかという問いが生じる。[2] パズルは，器官や身体にとってそれらが可能的に生きるということと現実的に生きるということの間にいかなる区別をも引きえないのではないかということである。このパズルの背後にある問いは可能態と現実態とは質料と形相に対しどのような関係にあるのかという優れて存在論的な問いである。このパズルによりデカルト的物体概念になれた研究者たちは当惑し，例えばバーニエトは「アリストテレスの世界における動物身体の物理的素材はすでに意識を懐妊している」と述べ，もはや「彼の心の哲学は信頼に値しない」と批評している。[3] バーニエトのこの主張は心身論の基礎となる彼の質料形相論ももはや信頼に値しないことを含意するであろう。

ウイリアムズも同様の問題を指摘している。「アリストテレスは死体は真にはbody（身体）ではないと強く主張する。それ故に，bodyは生命を欠きえないので，もしそれが生命を持つなら人間を構成し，生命を欠くなら死体を構成するところのものをbodyとして同定することさえできない。しかし，それでは，このことは生命を持つかまたは欠くことができ，それに生命が発生しかも生きているということが本質的属性ではない何ものかのために，単に別の術語例えば［大文字の］Bodyを必要とすることをわれわれに示しているのではないか」。[4] このパズルをBody-bodyアポリアと名付ける。以下，質料

形相論の心身論への適用ではなく，その成り立ちにあったイデア論批判を背景にして，質料・形相と可能態・現実態の関係の一般的形而上学的解明を試み，このアポリアを解決したい。

2

最初にアリストテレスの形而上学的思索の方法を簡単に確認したい。アリストテレスの形而上学における企図は，運動や生命の発生と成長等の特定の視点から存在を考察する自然学や生物学等の個別諸科学の知見を十分に取り入れながらも，自然物，人工物，数，永遠存在であれ存在一般を「存在であるかぎりの存在の第一根拠」(1003 a 31)と表現される視点から考察し，存在の原理，根拠としての実体を探求することであった。そしてこれはパルメニデス，ヘラクレイトスそしてプラトンが彼らの存在論において解明を試みた存在の根拠の問いを引き受けたものであり，彼の「形而上学」において遂行される原理探求は，論理的存在論，万物流動説さらにとりわけイデア論のもつアポリアを解決しうるものでなければならない。彼の質料形相論はこの動機の下に現象的存在の原理論として存在論において第一義的に展開されるものである。

彼の形而上学構築の方法として，「いかに語るべきか」という論理の導きに従うロギコースな手法と「いかにあるか」を経験的な観察に基づき探求するピュシコースな手法が「それに劣らず」採用されている。(1030 a 27 ff) 彼の「形而上学」の論述がアポレマティックであるという印象を与えるのは，この二つの手法を統一するものが存在せず，双方による議論が錯綜していることがその一因であると思われる。今後ロギコースな手法を方法Ｌと呼び，ピュシコースな手法を方法Ｐと呼ぶことにし，二つの手法の混同からくる混乱を避けたい。これは原理レヴェルと生成レヴェルの議論を分節するためにも重要な手続きである。原理そのものは観察を拒絶するとすれば，それ自身として一般的に，整合的に論じられねばならない。しかし，それは現実の観察に

基づく情報と齟齬するものであってはならない。原理レヴェルと生成レヴェルのフィードバックが不可欠な所以である。

アリストテレスの形而上学を理解するためには，彼が自らの形而上学を構築する際に対決しなければならなかったプラトンのイデア論に対する彼の批判を考察することは不可欠な手続きである。アリストテレスによれば，イデア論の「最大の」問題はイデアが可感的事物の存在と生成，運動転化の根拠でありまたそれらの認識の根拠であると主張されるが，イデアはそれらのことに対し「なんら役にたたない」ということである。(991 a 8 ff, 991 b 4 ff) この世の事物がイデアを分有するという考えは「無意味な語り」にすぎないとされる。(992 a 28) アリストテレスは，たとえ仮にイデアとその分有を認めたとしても，「イデアに与る事物はこれを動かすものがなければ生成しない」(991 b 5) とし，生成レヴェルにおける始動因の介在の必然性を提示する。プラトンの問題はイデアが生成世界の説明原理として何等機能していないということにある。

これらの批判は現実世界の存在と生成の自らによる観察分析に基づくものであり，現実世界をアポリアに陥ることなく説明しうるものでなければ無益であるという一貫した視点に立っている。彼はこの現実世界を最もよく説明しうるものがあれば，それが原理として存在するという説明的関心から原理論を展開していると思われる。ただし，彼の説明的関心ということは一種のプラグマティズムではなく，実在の様式の理解に基づくものである。アリストテレスは「それぞれの事物について「何故にということ」を把握するまでは，われわれはそれぞれを知っているとは思わない」(194 b 18-19) と述べ，「ｐの故にｑ」という説明形式で成立している事物と根拠の関係を把握することが知識を持つということであるとする。そこでは「何故か」という説明を求める問いが真正な根拠の問いであるためには，その答えにより事物ｑを知っているないし理解していると「思う」(71 b 9 ff, 94 a 20, 194 b 18) という認識主体の概念形成をめぐり，実在とそれに対応する概念についての反省的な一定の信念様式が不可欠となる。つまり根拠はそれについて与えられる説明によりわれわれが納得する説明様式とは離れていず，根拠の存在はその

認識の様式とは独立に決定されるものではない。彼は「自然学」II 3 で形相因，質料因，始動因，目的因のいわゆる四原因論を展開したのちに「事物には根拠があるということそしてそれがその数においてはわれわれの説いた数だけあるということは明かである。すなわちそれだけの数というのは「何故に」という問いが含んでいるのと同じだけの数である」(II 7　198 a 14-16) と述べ，真正な何故にの問いに答えとなるものの数が事物の根拠の種類の数であるとしている。世界そのものが四種類の説明的な構造からなっている。そしてその四種の説明様式のそれぞれにおいて，知識をもたらす最善の説明は実在の構造に対応していると考えられている。根拠の存在は認識様式とは独立にそれ自身で決定されているものではない。根拠に対するこの制約を知識制約と呼ぶとすれば，これはプラトンのイデア論の持つ極端な実在論，即ち事物の本性はそれについて対応する認識主体が持つ概念の本性とは独立に決定，固定されるという立場に対する批判となっている。[5] 四原因論は彼の説明的な関心のもとに知識制約のうちでイデア論に取ってかわりうる原理論として提示されている。ただし後に見るように，具体的なケースにおいて何故にという問いに対する答となるものの知識は形相因と質料因の場合には異なる認識機能に属する。説明的な関心のもとに原因論を一括して纏めるということは形相因等それぞれ四つの根拠の認識の様式が同一であるということを意味してはいない。従って知識制約によれば，それぞれの存在様式の異なりは説明様式，認知様式の異なりに対応したものであると言える。

3

アリストテレス自身による原理論をめぐる問題は「難問集」で端的に「はたして個々の事物よりほかに別に何物も存在しないのか」と定式化される。(III 4 999 a 26 cf.XI 2) これは「最も困難で，最も検討されるべき」存在論的な問いである。(999 a 24 ff) 可感的事物以外に存在しないとすれば，(1)無限の個物に共通するものがない故に，感覚的な認識のみで，普遍の相の下に認

識することは不可能となり，さらに(2)何等永遠なものや不変なものも存在しないことになる。

プラトンは普遍である類と種差からなるイデア（例，動物それ自体と二本足それ自体から形成される人間それ自体）により(1)と(2)を否定する。(999 a 30 f) アリストテレスはイデア論の持つ諸難点を指摘し，「難問集」においては暫定的なものであるが，その乗り越えを試みる。(999 a 32, cf.I 9, VII 14) アリストテレスは可感的事物が質料と形相の全合成体であるとして，全合成体より形相や質料は「とりわけ存在している」(999 a 32) そのような質料形相論により，(1)(2)に解決案を提示する。そこでの質料と形相の存在は「永遠的なものが全く存在しないなら，生成も不可能である」(999 b 5) という主張を，自然の観察記述によらずに，方法Lによりにつまり議論の導きのままに弁証することによって，提示される。前提１：生成には必ず生成過程にあるものと，それがそこから生成してくる何かがなければならない。前提２：この生成過程はどこかで終止せねばならない。前提３：非存在からの生成は不可能である。結論：故に，この過程の最初のものは生成したものではなく永遠でなければならない。これが質料の永遠性ないしは生成消滅を免れていることの弁証である。他方，形相についても同様に，生成過程は無限ではありえず，生成の完了は生成過程のうちにはなく，存在していなければならないという議論で弁証される。(999 b 5 ff, cf.192 a 29 ff, 1032 b 31 ff, 1033 b 2 ff, 1069 b 35 ff, 1075 b 24 ff) そしてもし永遠な質料と形相が存在するとすれば，すべての事物から離れて別にあるのか，それともそれは或る事物の場合には内在し，他の事物の場合には離存するそのようなものであるのか，それとも内在するのかが探求課題となる。つまり質料形相の存在様式は全合成体の存在様式とどのような関係にあるかが問われる。(999 a 34)

そもそも原理が永遠であるとはどういうことか。人間や百合の質料が，生成消滅するこの世界にあるこの人間やこの百合の質料から，離存して永遠にあるというのであれば，プラトンと同様の形而上学を構成することになる。他方，個々の生成物に内在するものであるとすれば生成物の消滅とともに消滅するのではないか，そうでないとすれば，永遠なものがどうして可滅的な

ものの原理であるのか等の問いが解決されねばならない。

原理と生成物との関係の理解に対する示唆をアリストテレスのひとつのイデア論批判のうちに見いだすことができる。そこではプラトンは人間のような可感的対象に「自体」を加えるだけで，「この世の事物とは別に或る自然があると言いながら，しかもこれらを可感的な事物と全く同じであるかのように説いている」(997 b 5 ff, cf.1040 b 28 ff) と批判されている。つまりイデアは可感的事物を永遠化したものにすぎないという批判は，感覚の対象となる生成のレヴェルと生成の原理のレヴェルの議論に混同があるということである。彼はイデア論を克服しながら，永遠とされる原理と生成世界との関係をどのように構築しているのか，永遠ということで実質何が理解されているのか，どのように原理論としての質料形相論の次元と，生成論におけるその発現形態の次元を区別し関係づけているのかがここで解明されねばならない。

4

アリストテレスはプラトンの問題を踏まえ，生成消滅する可感的事物とその生成の原理の存在と認識の様式の相違を指摘し，両者の混同を戒める。アリストテレスは生成消滅過程を経るものは質料でも形相でもなく，「作りだされるのはこれなる個物であり，生成するのは形相と質料からなるもの」(1043 b 17 f) であると主張し，合成体として語ることのできるものが生成次元に浮上する。(cf.1033 b 17, 192 a 25) 質料と形相の全合成体はカリアスのような「全一なるこれ」と呼ばれる個物である。(1033 b 24)「全一なるものがすでに存在する時，即ちこのような形相がこれこれなる肉や骨のうちにある時，これがカリアスでありソクラテスである」。(1034 a 5) このように端的な生成はカリアスのような個物に帰属する。

そして端的な生成の帰結である個々の全合成体は感覚により認識される。(1036 a 6 ff) 他方，その原理は「類比によって認識される」。(191 a 8, 1071 a 33) アリストテレスは生成レヴェルにおける原理の類比的な多様な現れと，

その根拠レヴェルにおける原理の同一性を次のように述べる。「これらの事物が異なれば，それだけその構成要素または原理も異なっている。この意味では，すべての事物が同じ構成要素または原理を持っているとは言えない。だが，類比的にはそう言える。即ち，何物にも形相と欠除態と質料との三つの原理がある，とわれわれの言う意味では，同じだと言える」。(1070 b 15-19, 1071 a 27 ff) 生成の原理が類比的に同一であるとは，生成レヴェルにおいて同一の役割を担う三原理が類比的につまりその比例関係を維持したまま個々別々の生成を引き起こすということである。昼から夜が生起するのは空気が光から闇を受容することによってであり，人が病気から健康になる場合も同じ構造を持つ。(1070 b 21) 昼から夜へ，健康から病気へと転化するのはそれぞれ空気であり人なのである。自然物である人間の生成の例を取れば，精子と卵子（アリストテレスの術語では月経血 (1044 a 35)）が合着する時，卵子は人間であることの欠如態と合着したことを意味し，そこに現実の生成が始まる。通時的に言うことが許されるなら，そこでは質料，形相そして欠如態の三原理が言わば三角原理として機能する。その時卵子そのものは言うまでもなく生成されるもの，合成体であるが，卵子の生成には人間の生成とは独立の三角原理が生成の基体として類比的に適用される。三原理の関係はこのように一義的である。質料は，ここでは空気，人そして卵子であるが，規定を受動する原理であるのに対し，形相とその否定である欠除態は規定的原理であるという，言わば三者間の比例関係は維持され，その条件を満たすものがある限り，生成レヴェルで「形相として」「質料として」類比原理の具体的適用を受ける。(eg.1033 b 17, 412 a 20, 724 b 6) ただし，類比原理の適用は，決して何か他の実体の質料として理解されることはない全合成体の形相が究極の基準となる。このことはアリストテレスの質料形相論が生成世界の実体論であることをめざし，単にロギコースに弁証されているのではないことを示している。

受容原理である質料がいかにしてロゴスとされる形相を受容するのかという問に対して，アリストテレスは生成界に存在する「外的な根拠」である動かすものが形相のロゴスを持ち，質料に対して作用することによってである

とする。(1070 b 22 ff)即ち質料とロゴスを三原理枠に実際はめ込む仕事が始動因の役割である。生成の現場では始動因はそれぞれ異なるが機能は同一である。それ故に,「質料と形相と欠除態と動かすものはすべての事物に共通している」と始動因も類比原理に数えられる。(1071 a 34) 類比的には,構成要素は三つ,根拠または原理は四つある。(1070 b 25) これが原理が生成世界に参与する様式である。

始動因がロゴスを持つという理解には,「人が人を生む」としばしば語られる生物の持つ複製機構の方法Pによる観察解明がそのモデルになったと思われる。(194 b 13, 640 a 25, 1033 b 32, 1071 a 15)[6] この複製機構に見られるように,「何故に自然はこれほど秩序正しいのか」という説明的関心の下にある問いに対し,善による目的的説明の道が開かれた。アリストテレスは「われわれは自然の生成には目的因や始動因のような多くの根拠を観察する(ὁρῶμεν) ので,これらについてどれが第一の自然で,どれが第二の自然かを判別しなければならない。だが「何かのために」とわれわれが語るところのものが第一のもののように思える」(639 b 12-15) と述べるが,自然の観察が目的因の確立に寄与していることは疑い得ない。彼は「最も自然的なこと」(415 a 26) であるとするこの複製機構の観察探求を通じて,自然が目的的であることを確信し,複製機構の絶妙さを説明するものとして四原因論を展開する。(*Phys* II 7, *Met.*V 4, *De.Par.An.*I 1) 目的因・形相因としての人間であることのロゴスを現実態において持つ父親が自らの精子を介して始動因として,質料とされる母親の卵子に働きかけ合着を引き起こし,それは人間の現実化へと方向づけられた生成過程をたどる。この合着発生の過程の観察を基礎に自然の秩序正しさの考究解明が自然学者たちを乗り越え,四原因論や現実態と可能態等の基本概念を生み,単に自然物の生成の解明だけではなく,形而上学構築のひとつのモデルを提供している。そして彼はこの見解はプラトンや自然哲学者の自然の観察能力と自己のそれの差異から生じたと解している。(642 a 26 ff, 778 a 35 ff, 788 b 20 ff) プラトン同様可感的物体以外の存在を承認しながらも,アリストテレスは現象と超越界のその実質と関係については,形而上学的思索,方法Lのみならず自然の観察,方法Pを手がか

りに新たな考察を企ている。

原理一般レヴェルと具体的な生成レヴェルの区別と関係は学としての形而上学と個別諸科学の関係に対するアリストテレスの理解を示している。類比的存在である形而上学的原理は，それ自身として論じられるべきレヴェルを持つとともに，あらゆる生成物の原理，根拠として個別諸科学の対象である或るアスペクトの下に見られた諸存在を構成している。形而上学的原理の真理性は個別諸科学の営みにおいて確認され，個別諸科学の現場における探求は形而上学的原理構成の足場と素材とを提供している。ふたつの学的営みのこのような内的連関が，イデアのような離れた存在根拠の架空性を批判する基礎をなす。プラトンにおいては可感的な学から理性的な学への上昇過程の究極に形而上学が存在した。特に形式的かつ抽象的な数学はイデア把握への飛翔の踏み台として高い評価を与えられた。(*Resp.*511 aff) アリストテレスにおいてはむしろ複製機構の詳しい観察が四原因論を確立させ，また形而上学的思索の足場となっている。個別諸科学と形而上学との連続性，フィードバックの関係が相互を豊かにしている。自然学者は質料と形相の双方を認識せねばならないとされる時 (1037 a 14，194 a 12)，個別諸科学が形而上学に基礎づけられていることが解り，また形而上学的原理は自然の観察に基礎づけられる。このように彼の形而上学と個別諸科学は相互補完的である。

5

この類比的三原理は具体的な生成の原理ではあるが，それ自身として特徴を把握するのは形而上学的思索と言ってよく，原理としての質料は一般的，普遍的に論じられる。方法Lによる質料の特徴の記述は随所に見られる。ここでは「形而上学」VII 3，VII 8 そして「自然学」I 9 そして「生成消滅論」II 9 における「いかに語るべきか」という視点からのロギコースな質料の特徴づけを見ておく。

VII 3 では質料は性質や分量等の属性がそれに帰属する基体として特徴づ

けられる。思考実験により基体から長さや広さ等すべての規定性を抽き去る時,「他のものが抽き去られる時,残されるものは何も現れない(οὐ φαίνεται)」のであり,残されるものは「これらにより規定されるもの」である被規定的な基体だけとなる。(1029 a 11-18) このように基体である質料が実体であるとの議論が方法Lにより展開される。しかし質料が実体であることは,基体性以外の実体の条件である「離存性と或るこれであること」が満たされないために否定される。(1029 a 28) この一連の議論のなかで,アリストテレスは質料を一般的に「質料と私が呼ぶものはそれ自体として何かであるとも,どれほどの量であるとも……語られることのないものである」(1029 a 20) とする。原理レヴェルにおいては,質料は「それ自体として」と語られ,類比的に質料が適用される時とは異なる表現が用いられる。そのレヴェルでは質料は「それ自体としては不可知である」。(cf. VII 10 1036 a 9) この箇所は「それ自体として」語られる方法Lによる原理レヴェルでの質料の被規定性が特徴づけられていると理解する時,生成レヴェルで「現象においては(τῷ φαίνεσθαι) これ」(1070 a 9)「数えられる」(190 b 25) と特定的なものとして質料が記述される場合と矛盾するものではないことが知られる。(7)

「自然学」I 9 において,質料がそれ自体不生不滅であることが論じられる。そこでの文脈は,質料が欠如態との合成体として現実の生成世界に現れている場合と「可能態として(κατὰ δύναμιν)」つまり生成世界を作り出す原理レヴェルにおける力が問題にされる場合が対比されている。原理レヴェルの存在論的様式を特徴づける可能態はそれ自体として見る時はその可能性がどれほど大きなものであるにしても発現されていないのであり,ブラックボックスに比することができるであろう。アリストテレスは「可能態は質料として普遍的でありかつ無規定的でありまた普遍的で無規定的なものについてある」(1087 a 16-18) と可能態としての質料或いは質料としての可能態を特徴づけている。アリストテレスは「質料はそこに欠如態があるところのものとしてはそれ自体として滅びる。というのも欠如態はそのなかで滅びるものだからである。だが可能態としてはそれ自体として滅びることはなく,それは

不滅かつ不生であることは必然である」と述べ，生成レヴェルと原理レヴェルを対比している。(192 a 26-28) この主張の論拠も方法Lにより，不生不滅な生成の始点として存在する基体性が質料であると原理レヴェルにおける規定として提示されている。もし質料が生成するとすれば，そこからそれが生成する第一の基体がすでに措定されていなければならない。しかし，「何か事物が内在するそのものから付帯的にではなしに生成する，それぞれの事物にとって第一の基体を私は質料と呼ぶ」(192 a 31) と質料が規定されていることからして，生成の第一の基体は定義上質料のことであり，質料は生成することはありえない。他方，質料が消滅するとすれば，消滅の過程が最後に到達するものが定義上第一の基体とされる質料である以上，消滅する前に消滅していなければならないという不合理なことになり，質料は消滅することはありえないとされる。パルメニデス等の論理主義的な存在論による生成の否定に対し，アリストテレスは対抗する意味もあって，「どう語らねばならないか」という視点から生成を分析する際には，質料の基体性，被規定性はこのような形でしか語りえないと思われる。

「形而上学」VII 7-9 の生成論においても「自然学」I 巻においても，生成の分析は方法Lにより展開されている。そこではアリストテレスはパルメニデスとの対決を通して存在と生成を次のように関係づける。「もし前もって何ものも存在しないなら，何も生成することはできない。従って，生成するものの或る部分が存在することの必然的であることは明白である。なぜなら，ものの質料はそれの或る部分だから（というのは，その質料はそれの生成過程のうちに内在しており，生成してそのものになるのもこの質料だから)」。(1032 b 30-1033 a 1) これはパルメニデスが生成否定を導くディレンマ「有るものは有るものからか有らぬものかからのどちらかから存在すべく生成する」(DK 28 B 8 のパラフレーズ) を彼の論理主義的存在論から主張したのに対し，アリストテレスは「われわれは有るものから，または有らぬものから何かが生成すると主張する」(191 a 34) とし正面から対峙する。彼は存在は多くの仕方で語られるという基本的な存在理解のもとに，存在と非存在を或る有るものと或る有らぬものという仕方で受けとめる。(185 a 21，186 b 14

ff, 187 a 5)アリストテレスは事物はそれ自体有らぬものである欠如態からは端的には生成しえないという点においてパルメニデスに同意する。ただ質料とセットで論じられる欠如態の場合のように，付帯的には，有らぬものからの生成を認めている。他方，「数えられる質料」からの生成を端的な生成と認める。(190 b 25-26)ただし質料は数においては一つであるが，種類においては形相を獲得していない段階であるが故に欠如態を伴っているという意味で二つである。それ故に質料は或る有るものつまり「数えられる」(190 b 25) 存在でありまた同時に或る有らぬものつまり「付帯的には有らぬもの」(192 a 4) である。このようにアリストテレスは質料をめぐる端的ー付帯的の操作によりパルメニデスのディレンマを回避する。

アリストテレスは「生成消滅論」II 9 で，生成の原理を「普遍的に把握する」とし，方法Lを採用し質料の特徴を探る。方法Lの採用により「われわれは個々の生成のケースを容易に観察することができるであろう」(335 a 27) と述べられ，方法Pによる実際の生成の現場の理解が促進されるという指摘は，双方の関係を知るうえで重要である。方法Lにより質料の二つの特徴が挙げられる。(335 a 28 ff) 一つは質料は質料である限りおいて，作用を受け (πάσχειν)，動かされる (κινεῖσθαι) という受動性，被規定性をその特徴として持つ。さらに，質料は有ることも有らぬことも可能なもの (δυνατόν) という特徴を持つ。質料が形相または欠除態であれ，規定性を受動するということは，質料がその形相を持つことも持たないことも可能な不定的な原理であるということであり，被規定性と可能性は同一事態の別の表現であると言える。以上，質料の一般的な特徴がロギコースに述べられている箇所を考察した。

纏めるならば，質料はそれ自体としては（M 1）不生不滅で（M 2）不可知な原理としての存在であるが，方法Lにより生成の（M 3）基体としてその存在が措定される。それは欠如態の（M 4）規定を受けることにより数えられる質料として生成レヴェルに浮上する。そこでは質料は生成の始点として存在する（M 3）基体であり，形相の（M 4）規定を受ける（M 5）可能性を保持しながら，形相獲得に方向づけられる。このように方法Lによりア

リストテレスは質料を五つの特徴を持つものとして論じている。

6

それでは，形相はどのように特徴づけられるべきものであろうか。形相（εἶδος）はプラトンのイデア（εἶδος）と名称を同じくしその親近性を否定しえないが，形相論はイデア論が陥るアポリアを回避しうるものでなければならない。アリストテレスはそのために形相の存在がそこでしかそのものとして把握されえない場面を特定し，それをその普遍的構成要素に分節し一般的に語る場面と区別している。ここでは数学的形相や純粋形相を除外し，生成消滅する可感覚的事物の形相を問題にするが，形相は生成次元では質料なしには現実存在しえないということが重要なポイントとなる。イデアが個々の事物から「離れて別に存在するもの」として説くのを「全く無用である」と批判する時(1033 b 27)，アリストテレスの質料形相論においては例えば青銅の球を制作する時，「この形相（球）を他のもの（青銅）のうち作る」のであって，形相が質料から離れていないそのような両者の関係が模索されている。(1033 a 35) この不可離性は両者の関係を「このようなこれ」(1033 b 23)，「全一的なこれ」(1033 b 24)，「シモン」(1030 b 17)，また生成物，制作物における質料の持続を表現すべく「これこれ製の」(cf.1033 a 17) というような句により表現されている。形相はイデアのように離存的ではなく生成物に内在し（ἐνόν 1037 a 29, cf.1034 a 6)，「ただ説明においてのみ離存的」(193 b 4, 1042 a 29) と特徴づけられていることは重要である。

しかしそれはどのような様式で可感的事物に内在しているのか，普遍的要素の一事例としてであれば，ただちにその普遍的要素は質料に分有されるのか等々イデア論の難問が待ち受けている。アリストテレスの取る戦略は可能的な質料の現実活動という場面においてだけ形相を知ることができるとすることである。全合成体は不可分な一なるものとして現実活動している。形相は全合成体をその全合成体たらしめる本質としてのロゴスであり，事物が一

つなるものであることの根拠として不可分な一である。アリストテレスは形相を不可分な規定性とすることにより，イデア分有論を回避している。というのも，不可分なものは或る意味では普遍であり，また個でもあるが，或る意味ではそのどちらでもないからである。例えば，或る自然種の構成メンバーが一個体であったとして，その本質である不可分な形相は個であると理解されようが，現実的には多数のメンバーがあっても同一であるという意味で普遍でもあるからである。そうであるとすれば，不可分な一性は個と普遍が問題にされるところとは異なる独自の次元を持っているとすべきである。その意味で不可分なものは個でも普遍でもない。(8) それ故に形相の質料への内在性ということでアリストテレスが意味しているのは，それが現実態においてしかつまり全合成体の現実活動の場面において不可分なものとしてしか存在しえないという一つの存在様式のことである。この主張は方法Lによるものであると同時に，方法Pにより全合成体が不可分な一なるものとして活動している事実性の裏打ちに踏みとどまっていることによる。そしてこの独自の次元にある不可分な本質を把握する認識機能は，先の知識制約から言って，一定の時空のなかで個物を対象とする感覚とは異なる，独自なものである。それは「何かについて何か」を述定する結合と分離の思考様式ではなく，その不可分な一なるものに触れるか触れないかであるが故に決して誤るということのない一つの認識様式である。以上がアリストテレスが自らの形相がイデアと異なることを示すべく取る戦略である。

7

ここでは先ず形相が本質のロゴスであるということ，そしてそのロゴスは生成消滅の過程をもたないものであること，次にそれが事物の不可分な一性の根拠であるということ，そしてその認識様式についてそれぞれ彼の論拠を見る。

「形相は本質（「もともと何であったか」）のロゴスである」（194 b 27，1013

a 27, cf.996 b 8) と言われる。形相は様々な規定を受けるが，最も基本的な形相理解がここに見られる。その形相・ロゴスの第一の例として，ピュタゴラスが発見したハーモニーの根拠としての比（λόγος）が挙げられる。(194 b 27, 1013 a 28) ハーモニーは「高音と低音における数の比」と本質規定される。(90 a 19)一オクターブのハーモニーが有るところ，そこに一対二のロゴスが存在することを否定する人はいないであろう。そして或る調和のとれた音を感覚することはできるが，一対二という比は非可感的存在である。ところが，もしこのロゴスがどこか離れたところに普遍的に存在し，それがすべての一オクターブの音程に分有されるという説明をするのであれば，それはただちにプラトニズムに陥ることになる。形相は「説明（λόγος）においてのみ離存的である」。(193 b 4, 1042 a 29) 形相が発現している時，その形相は最も優れた意味で「端的に有る」と呼ばれる実体である。(1028 a 31) 或る一定の時空に生起する一オクターブの音程のある所，そこに一対二というその本質のロゴスが現実活動している。しかしそのロゴスは生成消滅過程を伴わないで，存在しまた非存在する。この点に関してアリストテレスは「それは永遠的なものであるか，生成過程，消滅過程なしに生成してしまっているもの，消滅してしまっているものであること必然である。……形相は誰もこれを作りも，生みだしもしない」(1043 b 15-17) と述べているが，これは十分に理解できることである。始動因である人が一オクターブの和音を作る時，一対二の比の長さの弦を弾く。そのロゴスは演奏者である人の心にあり生成過程なしに存在している。(cf.1032 b 1) 一オクターブの和音が奏でられている時，それは一なるものとして現実活動している。

アリストテレスは事物の一性の根拠としての不可分性が問題となる場面での本質を表現するものとして，「もともと何であったか（τὸ τί ἦν εἶναι TEE)」という句を用いる。この表現（以後 TEE と略記）はもう一つの句 τί ἐστίν のように「本質のうちに述語されるものども（τὰ ἐν τῷ τί ἐστί κατηγορούμενα)」(82 b 37 ff) という仕方で本質の構成要素が多なるものとして分節される場面に用いられる本質（τί ἐστίν）と区別される。TEE は全合成体の一性が問題とされる場面で用いられるそれ自身不可分で一なる本質

である。事物の一性の根拠としての形相についてアリストテレスは「或る全体的なもの，すなわち一つの形相が存在しなければ，何であれわれわれはそれを一なるものとは言わない」(1016 b 11-14) と述べている。この形相・本質を認識するものが誤ることのない思惟即ちヌース (νοῦς) である。アリストテレスは「「もともと何であったか」という意味での本質 (τοῦ τί ἐστι κατὰ τὸ τί ἦν εἶναι) の思惟 (ὁ νοῦς) は真でありそして何かについて何か (τι κατά τινος) を述定することはない」と述べる。(430 b 27 ff) 先の一オクターブのハーモニーの例を取れば，思惟が一対二の比を把握する。この比が普遍的であるかどうかを問題にするのは，現場を離れた抽象の段階においてのことである。現実的にその和音が存在している時，その比はその和音を存在せしめる不可分な根拠として存在している。現実活動しているその形相はその構成要素に分割されることなく不可分であり，その認識には誤ることはありえない。(1034 a 8，1051 b 30 ff) なぜなら，心は何かを何かに結合したり分離したりする判断を行っているのではなく，不可分な形相に「触れている (θιγεῖν)」か，触れていないかのいずれかであるからである。(1051 b 24 ff，430 a 26)[9] アリストテレスは「一般に事物の本質 (TEE) を思惟している思惟 (ἡ νοήσις ἀδιαίρετος ἡ νοῦσα) が分割されないものであり，また時間においても，場所においても，説明においても分離されえない事物は最も主として一つであり，それらのうちでも実体がそうである。」(1016 b 1-3，cf.430 b 5 ff) としている。これは前後があるところで時空における特定が起こり，また抽象作用により一般的な説明を行うことができることに対して，思惟しているという現在分詞で表現されている事態は思惟活動の現在的なものであることを示し，時間の前後に分割することのできない状況を想定している。ただし，時空において分離という形で限定できないものであると言っても，思惟が或る事物の本質を把握する時には，把握された不可分な本質が時空内に限定されるその当の事物の本質であるということにおいて疑義が起こるわけではない。というのも形相の機能が実現されているのはそれがその形相である全合成体においてのみであるからである。

時空の限定を受けない本質 TEE としての形相の把握は，時空における個

別化を前提にする普遍の把握の場面と異なる。この認識は何か一なるものについて多を述定して獲得する普遍の認識の様式とは対立的である。アリストテレスは本質（TEE）と普遍を一方本質は「一なるもの」であり，「基体について語られることはない」が，他方普遍は「常に或る基体について語られる」として対比している。(1038 b 14 ff) 本質はそれが現実活動している現場で「或るこれ」という仕方で述定ぬきに把握される。それに対し，普遍の把握は現実態においてあるものの「或るこれ」の認識ではなく，「このような」という仕方で可能態にあるものの抽象的な認識である。「およそ普遍的な内在要素は実体ではなく，また共通に述語されるもののいずれも或るこれ（τόδε τι）を意味表示することはなく，このようなもの（τοιόνδε）を意味表示すること明かである。……いかなる一つの実体も，完全現実態において内在している諸実体からなりこれらを自らのうちに含むということは不可能である」。(1038 b 35-1039 a 4, cf.1036 a 29) 現実態においてある形相の認識様式が不可分なものであるとすれば，それがその本質である事物の説明は定義となるが，普遍の相の下にある説明をする場はもはや「或るこれ」が捕まれる現実態の場ではなく，「このようなもの」として普遍的に語られるものとして把握される。

思惟による認識は時空や普遍的説明の限定を受ける次元とは異なる次元における把握である。アリストテレスは「人が長さを思惟する時，不可分なものを思惟することを妨げるものはない。というのもそれは現実態においては不可分なものでありかつ不可分の時間においてあるからである。というのも，時も長さと同様に不可分割でありまた可分割であるからである」(430 b 7-10) と述べ，現実態と可能態の次元の相違により分割ー不可分割に関して二つの次元を区別する。生成過程のうちにあるものは時間において可分割である。事物の不可分な本質についての「現実態に即する知識は事物と同じ」(431 a 1-2) であるとされるのも，先の知識制約に見られるように本質存在は触れられるか触れられないかという仕方で認識する思惟の現実活動によってのみ，その現実存在が固定されるからである。

纏めるなら，形相は第一義的に（Ｆ１）本質のロゴスであり，それは不可

分な事物の（F２）一性の根拠として自ら（F３）不可分なものであり（F４）現実活動している。そして（F５）思惟はそれに触れるという形で認識するが，そのさい認識される形相と認識者が持つ形相とは（F６）同一物であるそのような存在である。

アリストテレスがどのように現実態においてある形相を把握する場面と一般的に可能態においてある普遍的構成要素に分節して語る場面を区別しているかが以上で明かである。彼の形相論がこのようなものであるとすれば，それはイデア分有論のもつアポリアを回避している。形相はイデアのように離存的ではなく，全合成体の現実活動から不可離なものなのである。形相が不可分な本質という場面ではなく，多くの事物例えば人間に対し同一であると語られる場面では，それは普遍であるということになり，普遍的な構成要素例えば二本足や動物がどこかに存在し，かつそれによって構成される人間よりもより実体的であることになる。しかし，見てきたように多くのものについて述語づけられるというレヴェルで捉えられる普遍的構成要素が実体であるとすることは拒否されている。(1038 b 34 ff) それ故に以上のような知識的制約のもとにないイデアは不可分ではなく，単に感覚的存在に自体を付しただけのものであり，分有論のアポリアに直ちに巻き込まれてしまうことになる。

これまでに，質料と形相の特徴をそれぞれ論じた。一方では，質料はそれ自体としては可能態においてあり，それはブラックボックスに比することができ生成の基体として存在し生成消滅を免れたものとしてある。他方，形相はそれ自体としては現実態においてあり，事物の不可分な本質としてその現実活動を一なるものとして統御しており，そこにも生成消滅過程は存在しない。質料や形相が永遠であると言われていたことで，それらは少なくとも生成消滅過程を経るものではないと理解することは誤りではないであろう。両者の結合体のみが生成レヴェルにおいて生成消滅過程を蒙ることが明らかにされた。原理レヴェルにおいては質料はそれ自体としては不可知であり，それには方法Lによりその存在が生成の基体として措定される。現在性においてある形相は原理次元と生成次元は同一である。生成次元において現実態に

おいてある不可分な形相を思惟により触れることが形相の認識様式である。生成次元においては全合成体は感覚によりまず知られるということ，そしてそれを構成している形相と質料は普遍的な思考により類比的に知られる。

8

それでは生成レヴェルにおける全合成体の認識様式とその構成要素である形相と質料の認識様式に対して，原理レヴェルにおける形相と質料の認識様式はどのような関係にあるのであろうか。アリストテレスが「根拠と原理は，或る意味では相互に異なるが，或る意味では，つまりもし人が普遍的にまた類比的に語るなら，すべてについて同じである」(1070 a 31-33) と語る時，「普遍的にまた類比的に語る」という彼が提示する存在論の説明様式はどのように理解されるべきなのであろうか。本節においては，二つのレヴェルの認識様式の関係について取り組む。

先述のように説明的関心が彼の原理論の方法論的根拠になっているとして，この説明様式は感覚的，個別的な説明様式に対立する。ここでは原理がそれぞれ異なるものとして認識されるが，実際には原理として機能する事物が感覚により認識される。そのさい，その事物が原理として認識されるのか，それとも事実上原理ではあっても原理として認識することはできずに，事物が認識されるとすべきであろうか。これは感覚の認識能力の守備範囲の問題であるが，感覚には，或るものを他のすべてから識別するという，理性的な機能を前提した何かを何かとして認識する機能は第一義的にはないとすべきである。例えば感覚の固有の機能は赤色を感覚することであるが，赤色として知覚することはすでに他のものから識別する思考が働いている。(418 a 7 ff) それ故に，生成界において見いだされる事物が原理として認識されるとすれば，それは普遍的に類比的に考察される限りにおいてである。従って，或る事物が質料であると言われる時，それは類比的思考のもとに捉え直された表現であり，生成世界におけるアリストテレスの記述は常に二つの説明様式

が相補的に機能していると理解すべきである。この二つの説明様式の相即性により原理レヴェルのみならず，生成レヴェルでも根拠，原理について語ることができるのである。ただし，そこでは常に或る事物が異なる事物の根拠，原理であるとされる。形而上学的思考が感覚を越えて原理を類比的に把握する時，原理そのものは可感的事物を越えた永遠なものないし非時間的なものとしてしか語ることはできない。

現実態においてある形相は不可分なものであり普遍でも個でもなく，不可分なものを思惟する思惟によって把握される。それでは普遍的な類比的思考は本質把握には不要かと言えばそうではなく，思惟が事実的に触れている現実態においてある形相の説明をなし定義することにより普遍的な知識を獲得する場において形相として認識する機能が与えられていると言えよう。類比的に具体的な事物をそれぞれ形相としてまたは質料として把握することが普遍的思考の役割である。人間を例に取れば，「心が第一の実体であり，身体が質料である。普遍的には人間または動物が双方の結合体である」(1037 a 5-7) とされる。

生成途上にあるものの質料と形相は「相関的」(194 b 9) であるとされるのもこの思考の働きの故である。アリストテレスは「生成消滅論」I 5 で肉や骨という等質部分は双方とも質料そして形相でもあると「二重」に言われるとする。(321 b 20)[10] 動植物の形成には階層的な組織化があり，四元素は混合塊に対し質料となり，混合塊は骨や肉等の等質部分の質料となり，骨や肉はそれらに対し形相となり，次の段階で，それらが手や顔等の異質部分の質料となる。しかし，生成の終局において実現される形相は「全体的かつ完結的」(1016 b 17) なものであり，それに向かう途上の相関にある質料形相の相関性を基礎づける。この形相は決して他の実体の質料になることはない。この全体的形相が「全合成体 (σύνολος)」(eg.1033 b 17) を特権的なものにし，生成途上の合成体である異質，等質部分はそれに対する質料とされ，二重の相関のうちにある。これは全合成体の構成要素は近接なものであれ遠隔なものであれ全合成体の質料と呼ばれるからである。このような相関においてあるということは形相と質料はこの思考において普遍的に抽象されていることを

意味している。「科学的知識は普遍的なものについて」(1086 b 33, cf.1087 a 11)であるということからしてこれは不可欠な作業である。とはいえ本質の構成要素として分節される普遍についてである科学的知識はそれを統一する或るこれの認識に対して可能態においてあると言うこともできよう。他方，本質探求の過程において本質の説明が定義となるそのような説明を求める時に，「或るこれ」が思惟により触れられることを妨げるものはなく，この本質をめぐる二つの認識様式は相補的であると言えよう。以上でイデア論との対決において構築された質料形相論が知識制約のもとにある弱い実在論ないし概念論であると形容できること，そしてその存在様式と認識様式は可能態現実態論と内的なつまり双方を分離しては理解しえない関係にあることが明かにされたとしよう。

9

これまでの論述を踏まえることにより，ここで冒頭に挙げた心身論のパズルに取り組むことができる。パズルは可能態において生命を持つ身体と生きていなければ身体と呼ばれない身体とはどうしても合い入れないというところに存在した。「可能的に生命を持つ自然的物体」とされる霊魂の定義の質料部分に現れる可能態をどのように理解することができるのかが，このパズル解決の鍵となる。今や，全体と部分の関係そして可能態と現実態との関係等いくつかの予備考察をもとに，霊魂の定義と同名異義原理に取り組む時，パズルが擬似的なものであると解決することができると思われる。

まず最初に確認しておかねばならないのは，定義が「一なる説明」でありうるのは定義される当の事物が「一なるもの」であるからである。(1037 a 19, cf.VII 12)そしてその一性の根拠が不可分な本質であった。アリストテレスは「霊魂論」II 1 の霊魂の定義である「可能的に生命を持つ自然的物体（身体）の形相」と「自然的器官的物体（身体）の第一の完成現実態」を様々な霊魂にも対応する最も共通な説明として提示している。定義は思考の抽象により

説明においてのみ質料から離存的な形相を普遍の相の下に形相として把握するものであった。現実態においてある不可分な形相を把握するものはヌースであったが，この普遍のレヴェルを司るのは類比による思考であった。そして類比的思考は植物ないし動物が一なる全合成体として現実活動していることを前提としている。何故形相の部分と質料の部分を分節するかと言えば，第一の実体である本質を本質として解明することが形而上学の目標だからである。

「形而上学」VII 10 そして VII 11 の企ては，多くの意味で語られる部分が全体とどのような関係にあるかを明かにすることである。一つのものとして生きている全合成体を「思考のうちで分離することは困難」(1036 b 2-3) であることがその問いを複雑にしている。定義がかかわる普遍の相が形相と質料の分離の文脈を提供している。「普遍的という意味での形相の(*τοῦ καθόλου καὶ τοῦ εἴδους*) 部分」と「質料としての部分」の類比的な思考による普遍的な判別が企てられている。(1036 a 28 ff) 語節 *βα* の字母 *α* と *β* はその語節の定義に形相の部分として含まれるのに対して，円とその部分である円分は円の定義に形相の部分としては含まれず，「質料としての部分」であるとされる。(1035 a 10 f) われわれの関心で言えば，「人間の形相のように，それは常に肉や骨そしてそのような部分に現れる。それでは果たしてこれらは形相即ちロゴスの部分なのであろうか。あるいはそうではなくて，これらはむしろ質料ではないか」(1036 b 3-6) ということが問題である。人間とその質料である骨と肉の関係はそれらは形相の部分ではなく，「全合成体の部分」であると言われる。(1035 a 18-20) このように質料は全合成体を前提にし，その存在を全体に依拠しているという意味で形相そして全体よりも「より後」の存在である。(1035 b 12, 20)

同名異義原理が問題にされるのは，この部分と全体の先後関係の文脈においてである。(cf.412 b 17 f, 734 b 25 ff) 肺蔵や手等の器官である異質部分はその機能を抜きにしては認識されず，しかもその機能は全合成体として生命がそこに宿っていなければ発揮しえない。アリストテレスは「人間の指はその全体によって，例えば「指は人間のこれこれの部分」という具合に定義さ

れる。それ故に，それらが或るものの質料としての部分（μέρη ὡς ὕλη）でありかつその或るものが質料としての部分に分割されるようなそれら諸部分は全体より後である」(1035 b 10-12) と述べている。それ故に全体から切断された指はもはやその名前では呼ばれ得ないのであり，そして類比的な思考による説明においてのみ指は生命の座が内在する全体から分割されその質料と見なされる。何故これらが「質料として」認定されるかと言えば，それらは形相を受容する座だからである。質料は形相の受動的な部分として類比的に特定される。換言すれば，生命体のなかで生命を受動する部分として器官が特徴づけられる。アリストテレスは手はどのような状況にあっても人間の部分であるというのではなく，「手が働きを遂行することができる（δυναμένη）限り，従って生命あるものである限り」において「手」であると言われるとしている。(1036 b 30-32) 生き続けるということは質料が生命を受動し続けることであるが，受動しうる能力，可能性もそれとともに持続すると理解することに何等矛盾は存在しない。

ここに何故質料としての器官が「可能的に生きる」という仕方での可能態と同定されるているかを理解する鍵が潜んでいるように思われる。ここでの可能性はもはや「事物Fとなる」生成の可能態ではなく，「事物Fである」存在の可能態である。生命を獲得したものは実体生成をもはや経ることはなく，存在を維持し続ける可能性が問題となる。「自然学」III 1でこの二つの可能態が論じられている。われわれがここで問題にする可能態は「或る種の事物においては，その同じ事物が可能態においてもあり完全現実態においてもある，……いずれも同時に能動的でもあり受動的でもある」(201 a 19-23) と特徴づけられる全合成体の存在の可能態である。[11] 全合成体の部分が質料と見なされるのは，それは或る能力を備えているからである。その能力つまり生命を受容する受動能力を備えている限り，同時に現実には生きているという事態が質料において生起している。手は生命原理により生きているので，生命あるものであっても霊魂との関連で言えば，生命を受動する質料であり可能態なのである。器官のすべての集合において考えてみても，この関係は変わらないであろう。形相は質料を必要とし，質料は形相によってのみ質料として

特定されるという関係にある以上，ここでは可能態とされる質料は現実態つまり生命あるものでもあるそのような存在の可能態のことであると思われる。

10

アリストテレスは存在の可能態というものの実質を最終質料の存在様式として探求している。ここでは，最終質料と全合成体の一性の解明を通じて，自然物において能動と受動が同時であるとされる事態がどのようなものであるかを検討したい。

アリストテレスはVII 17で「分析論後書」II巻の本質探求モデルにより根拠の問いとその応答の様式を提示する。そこでは根拠の問いのたてかたは「何故人間は人間か」というものは拒否され，質料と全合成体に分節して，「何故これら煉瓦や石が家であるのか」という様式でなされ，それに対する答は「質料が全合成体であるのは形相の故にである」という仕方でその本質を根拠として提示する。(1041 a 22 ff) こうする時，部分の集合が或る統一性を持った全体（ἓν εἶναι τὸ πᾶν）となることの根拠が明示される。(1041 b 11) この探求様式においてアリストテレスは質料と全合成体が或る種の同一性述定を構成するのを認めている。他方，統一性の根拠を持つ全合成体と質料の間に現実態と可能態という存在論的な身分差を確定している。語節 βα は字母 α と β からなるが「語節は単に字母どもであるのではなくて，さらにこれらとは異なる或る何ものかである」。(1041 b 16) つまり質料としての字母は αβ ないし βα 等の構成が考えられ不定であり，構成要素の間に一定の秩序を確立するものが語節の本質である。語節 βα と字母 β と α のひとつの組み合わせである βα は集積としては事実上同一である。彼は本質を実現する全合成体としての全体と部分の集積としての全体を ὅλον「統一的全体」と πᾶν「集積的全体」という表現で区別している。(1024 a 2) 全合成体は質料に統一性を付与されたものである。質料はたとえ部分の全てが揃っても可能態において

これであり，現実態においてこれではなく，これという統一性のもたらす規定性をもちえない。アリストテレスは質料と全合成体の間に存在論的な身分差を認めながら，同一性述定を許すのは，この集積的全体が成立する時，それが同時に形相を獲得し，統一的全体が存在すると考えていたからであると思われる。

アリストテレスが可能態である質料をその現実態である形相との関連で，それぞれ受動的な能力とその現実的な発現と捉える時，形相に近接的な内在原理としての質料が構成する原理の発現が理解されうる。「能動することと受動することの能力は一なるものとしてある」(1046 a 19) と語る事態が生成の終局である全合成体の出現の場面なのである。「油気のあるものは燃やされうる」(1046 a 24) とは，質料が燃えるという現実活動に対応しうる油気という受動的属性をもっていることであり，そのように物体が霊魂を受動しうる属性を備える時，全合成体が生起する。この状態にある質料は「固有の」，「特有の」質料 (1044 a 18，1044 b 3) と呼ばれ，全合成体に最も近い原因とされる「最終質料」のことである。「個物は最終質料と結んで，現にソクラテスである」。(1035 b 30) アリストテレスが「最終の質料と形相は生成しない」(1069 b 35) とするのも，「事物の最終の質料とその形相とは，前者は可能的に，後者は現実的に同じであり一つである」(1045 b 18) からである。一つのものにおける能力の現実活動においては，生成過程が存在せず，現実活動とその成果 (ἔργον) が別ではないそのようなものである。(1050 a 34)

アリストテレスは受動と能動が同一物において同時に起こることを，医者が自分自身を治療する比喩で説明している。(*Phys*.II 8　199 b 30 ff) これは記述の視点の相違を受け入れるものの，自然物においては能動と受動が同一者のなかに共存することを告げている。同一人であっても，医者として治療するものである限りにおいては能動者であり，患者として癒されるものである限りにおいては受動者である。健康の形相と目的を自ら持つ健康を作り出す始動因としての医者が治療を受ける患者として変化を受ける質料という四原因をそこに見いだすことができる。健康がその体において実現される時，その体はもはや直りつつあるのではなく，直された者つまり健康な者として

存在している。そして健康が存在することの可能性は持続する。一般的に言えば，最終質料が持つ全体形相を受動する能力が現実活動することは，同時に存在論的身分の異なる形相であるロゴスがその質料において現実活動することなのである。

アリストテレスは方法Pにより人間の生成を例に集積的全体と統一的全体の受動性と能動性の同時性を確立したように思える。ここでは彼の動物学の知見により，彼の形而上学の構築に個別科学の知見が活用されていることを確認したい。胎児はその骨や肉が作られながら，器官が作られていく。「等質部分と器官的部分は同時にできる」。(734 b 27-28) つまり器官の集積的全体は等質部分の集積的全体でもある。形成途上の肉や骨ないし器官は細胞分裂など栄養摂取を司る植物霊魂により組織化，統御されているにしても，人間霊魂は現実活動しておらず，「それらが調理され何か一なるものが生じるまでは」，人間であることに対しては言わば人間の形に綾どられた「穀粒の集積」に比較される。(1040 b 8)[12] 従ってこれらの調理の過程は生成の可能態の段階である。そして，人間に特有の器官がある。われわれの科学ではそれは脳髄であろうが，それは人間の本質が第一に内在している部分である。(1035 b 26) 脳髄という特権的な部分の質料である骨や肉は最終質料の等質部分であると言えるが，これが或る受動的属性を備えると同時に，全体形相が集積的全体に秩序を与え人間であることを現実活動させ，統一的全体が完成する。アリストテレスは「或るものは全体と同時的にある。即ちそれは優位に立つ部分であり，それのロゴスとしての実体が第一にそこに内在しているような部分である。例えば，それは心臓であるか，脳髄であるかである」(1035 b 25-27) と述べている。これは一見創発説のようであるが，霊魂は質料に内在しその組織化，統御原理として能動的に現実活動するのであって，質料の自己展開から生じるのではない。同時的であるということは質料としてみなされる等質，異質部分とそれらを統一する形相が存在論的な身分において等しいことを意味しない。一方は可能態であり，他方は現実態である。この両存在様式の同時性は等質部分の形成が異質部分の形成と同時的であること，また本質が宿る特権的な器官と全体の形成が同時的であるという動物学における

彼の観察に基礎づけられたと思われる。身体は生命を受容する能力を保ち，そして「これこれの物体（身体）における本質（TEE）」（412 b 11）である形相を受容している限り全合成体として存在し続けることができる。

11

今や，「霊魂論」II 1 の霊魂の定義を矛盾なく読むことができる。「可能的に生命を持つ自然的物体（身体）」とは全合成体の質料としてみなされる部分の集合なのである。「それ故に霊魂と身体が一つであるかどうかと探求するには及ばない。それはちょうど蜜鑞と［それに押された］印形とが一つであるかどうか，一般的には，それぞれのものの質料と質料がそれのであるところのそれとが一つであるかどうかと問う必要がないように」。（412 b 6-8）

質料が可能態において形相が現実態において一なるものである時，これは生きていることなのであるが，可能態は「相互に矛盾する両項への同時的可能態」（1050 b 8）である以上，集積的全体としての骨や肉は，それは異質部分の集積的全体でもあるが，霊魂の適切な受動能力を失うことがありうるということである。霊魂の定義の質料部分である「可能的に生命を持つ自然的物体」とは可能的に生命を持たない物体，死体でもある。従って，身体と全合成体の間の同一性述定は必然的ではなく，同時性の故に認められる事実的な一性の述定である。尚，アリストテレスは質料と形相が相関関係にあるとすれば，生者が死者の可能態，質料であり，死体は人間から生成するのではないかとの主張を拒否している。それは「付帯的」に成立する表現であって，死者の可能態はその生者の可能態でもあるその質料例えば骨や肉である。（1044 b 36 ff）換言すれば，霊魂から身体が切断された時，それはもはや全合成体の可能態ではなく，同名異義的にしか身体ではないのである。各部分に関しても同様である。

結　論

以上の議論から，心身論のパズルを提示した人々はアリストテレスの質料形相論そして可能態現実態論を適切に把握していなかったと結論することができる。アクリルが，一方同名異義原理により身体は生きた身体としてしか語り得ず，他方それにもかかわらず身体が可能態であるとされていることに当惑し，「霊魂の定義は解釈を拒絶する」と述べる時，彼は能動と受動の同時性の場を捉え損ねたのであった。(13) ウィリアムズが Body-body アポリアに陥ったのも同様であり，彼は生きた身体としてしか語り得ない body ということで，実は全合成体のことを意味していたのであった。そしてアリストテレスの「可能的に生命を持つ自然的物体」とは生きている人間の質料としての即ち集積的全体としての Body の記述なのであった。この Body と全合成体の間には必然的ではないが，事実的な同一性述定がその同時性の故に得られる。それ故に Body と body の二つの身体を要請する必要はなかったのである。ここに実はパズルは存在しないのである。彼らが困惑したのは可能態においてある質料の形而上学的かつ個別科学的特徴を理解しそこねたことにある。アリストテレスは彼の質料形相論を形而上学的思索と個別科学の実践のフィードバックのうちに構築したのであった。

最後に，冒頭にあげた質料形相論理解の根本的な対立に対し，一つの視点を提供できるように思える。全合成体は生成のレヴェルにおいては特権的な位置を占め基礎的なものであると言える。個別科学において全合成体の分析を通して質料とそのロゴスである形相が認識される。しかし，原理のレヴェルからすれば，全合成体は資格要件を満たす三原理の機能の帰結にすぎないということである。これはアリストテレスが二つの立場をそれぞれの視点から採用していることを示唆するように思える。

註

(1)　それぞれの解釈の担い手については D. Charles “Matter and Form: Unity, Persist-

ence, and Identity" p.80 n.6 参照。*Unity, Identity, and Explanation in Aristotle's Metaphysics* ed. T. Scaltsas et alt. 1994。

(2) J. Ackrill "Aristotle's Definitions of psuche" p.126 *Proceedings of the Aristotelian Society* 73 1972-73

(3) M. Burnyeat "Is an Aristotelian Philosophy of Mind Still Credible? A Draft" p.19, p.16 *Essays on Aristotle's De Anima* ed. M. Nussbaum 1992

(4) B. Williams "Hylomorphism" p.192 *Oxford Studies in Ancient Philosophy* Vol IV 1986 M. Gill も同様な問題意識から，全合成体を構成しまたそれが死ねばそれへと分解されていく「構成的な質料」と肝臓や肺がその機能を果たし全体の生命を維持するそのような「機能的質料」を区別する。M. Gill *Aristotle on Substance* p.132 1989 cf. M. Cohen "Hylomorphism and Functionalism" p.69 *Essays on Aristotle's De Anima* 1992

(5) 概念論について M. Morris の優れた論考から示唆を得ている。M. Morris *The Good and the True* p.15 ff, p.48, p.58 ff, 1992

(6) 複製機構および生物学と形而上学との関係については，拙稿「アリストテレスの目的論的自然観 I，II」「北大文学部紀要」no.79, 1994 no.80, 1994 参照

(7) 抽き去りの論述全体の解釈は紛糾している。この箇所 (1029 a 11) には「何も一切残らない」と「何も知覚可能なものは残らない」という二つの解釈が提示されている。私は(*οἰ φαίνεται οὐδὲν υπομένον*) を現象レヴェルのこととして「残されるものは何も現れない」と訳した。M. Schofield は前者の解釈を取るが，「他のものども」との対比で「残されるもの」が語られるので，一切残らないとすれば，この対比は崩れてしまう。(p.98) 尚，何も残らなければ a 18-19 で質料だけが実体の候補となるという思考実験の結論は導かれないだろう。D. Bostock は「何故アリストテレスは残るこの質料は知覚可能ではないということを含意せねばならなかったのか。……これはむしろ神秘的に思える」と述べ，彼はこの質料が知覚不能であるとされる「第一質料」のことを意味する以外にないと結論する。(p.77) しかし，この解釈の困難性として，彼は当該のものの様々な属性のみならずその「能力」までも抽き去るとされているが，「どんな種類の質料からも固有の形相を受け入れる能力を抽き去ることは不可能」であることを指摘している。結局 Bostock は抽き去られるもののイメージに関してアリストテレスは「幾分不正確」(p.77) であったと非難している。

M. J. Loux は 15 頁にわたり諸説を検討した後に，「(アリストテレス自身の) 初期の理論である実体の基体性基準への攻撃と思われるものは，真実にはその基準が組み込まれている理論的な枠組み全体に対するアリストテレスの評価の形式的な公告である。しかしもしそれがこの点に関して成功しているにしても，それはただ過度の問いを引き起こすという犠牲のもとでの成功にすぎない」(p.70) と悲観的な結論を述べている。

アリストテレスの質料解釈の歴史的な問題として常に第一質料が取りざたされてきたが，第一質料の導入は方法 L による原理レヴェルの質料の規定と生成レヴェルの具体的

な質料の規定との混同に由来すると思われる。現象しないからといって Bostock の言うように神秘的なのではなく，ロギコースには基体とされる質料はこのようにしか規定できないということである。「能力」の抽き去りに関しても，アリストテレスは明確に「物体の能力（σωμάτων δυνάμεις）」(1029 a 13) と限定しているので，原理レヴェルの質料の形相を受容する能力，可能性が抽き去られるわけではない。二つのレヴェルをそれぞれの文派において区別する時，従来陥っていた紛糾から解放されると思われる。

質料は生成の次元では類比原理として様々な事物において発現するが，生成が或る存在から起るのは原理の存在性と基体性を生成の始点において付与されるからである。アリストテレスは VII 8 において生成過程の無限遡源が不可能であることから基体は作られも生成もしないと主張する。(1033 b 5) これに対し Bostock は，実際に人が青銅の球を作るさいに「結局，青銅は作られるのである。しかしこのことから制作の無限遡源は帰結しない」と述べ，この論証が生成の現実に対応しないと批判する。彼はアリストテレスの基体は形成されないという一般原理は「証明を欠き弱い議論」であるとする。(p.130) 現実の生成がある以上，無限遡源が不可能であるという議論は方法Lにより質料があらかじめ基体として存在するという論証に用いられる。他方，現実の生成レヴェルでは青銅は銅と鉛を基体としてそれらから作られるのでありこれは方法Pにより明かにされる。(cf.1034 b 12-13) 質料の基体的存在性とその生成性は現実の生成がある以上，原理としての質料が生成次元に適用されると考える時，そこに矛盾は生じない。無限遡源を止めるこの基体性の議論は質料の原理の次元における特性を一般的に論証しており，生成次元での質料として取られる事物のことを指示してはいない。人工物である青銅の球の生成の例をとれば，青銅が持つさまざまな可能性のうちで，それが球の質料として球の生成の始点とされるのは，制作者がその形相である球をゴールに設定する時である。すなわち，その時青銅は球であることを欠いている欠如態といわば合着し，制作が始まる。それ故に，生成レヴェルにおいては質料と呼ばれるものは常に欠如態と数において一つにされたものである。生成の始点にある欠如態は形相を欠いた否定的な規定であるが故に，その生成は形相である本質の獲得へ方向づけられる。(1033 a 9) その意味で「生成は本質から（ἐκ τοῦ τί ἐστιν）」始まる，つまり形相も生成の基体なのである。(1034 a 32, 1029 a 3) 生成が起るところ，そこにはこれら三つの原理が生成をいわば監督，支配している。M. Schofield, "Metaph. Z3: some suggestions" *Phronesis* no.17 1972, D. Bostock, *Aristotle Metaphysics Books Z and H* 1994, M. J. Loux, *Primary Ousia An Essay on Aristotle's Metaphysics Z and H* 1991.

(8) P. Alexandros の次の指摘は思惟の知識制約を主張する私の主張とは次元の異なるものであるが，示唆的である。「アリストテレスの形相は個物のうちに何らかの仕方で分割されかつ分割されない（μεμερισμέναι πως καὶ ἀμέριστοι）実体である。一方，形相が個物に内在する限りにおいて分割されているないし個物そのものであるが，他方すべての個物において見いだされる本性の同一性に即しては不可分割である」。A. Alexan-

dros *In Aristotelis Metaphysica Commentaria* p.472 1891. 尚，不可分な形相(individual form) を主張する私の立場は個別形相 (particular form) を主張する人々とは異なる。例えば A. Code, "The Aporematic Approach to Primary Being in Metaphysics Z" p. 19 *New Essays on Aristotle*, ed. F. J. Pelletire J. King-Farlow 1984.

(9) 桑子敏雄氏は「たとえば「これは砂糖である」とか「かれはヒトである」とか判別するのは感覚能力であるが，「ヒトは動物である」というのはヌースである」と主張する。(p. 186) ヌースが主述の述定形式における把握であるとする典拠は得られないと思う。ヌースは知識と並列される一つの認知的状態 (ἕξις) であるとされるが (100 a 9)，これは通常の主述の述定形式により知識をもたらす思考 (διανοία) の把握とは異なる，不可分なものに対する認知的状態に与えられた名称であると解する。「分析論後書」の論証科学の文脈においては，科学の第一原理 (例えば，幾何学における大きさ) に，ちょうど固有感覚がその直接的対象 (例えば視覚に対する色) に触れるように，事実上触れているそのような認知状況に与えられた尊称である。桑子敏雄「エネルゲイア ── アリストテレス哲学の構造 ──」p.186 1993，拙稿 "Aristotle on Explanation: Demonstrative Science and Scientific Inquiry" Part II, p.60 ff「北大文学部紀要」no.71 参照。尚，「本質 TEE」と「本質 (τί ἐστίν)」との関係については，拙稿 "Aristotle on Explanation" Part I, p. 94, n.2, Part II Apendix "Tne Non-demonstrability of essence" p.77ff ibid, no.70 参照。

(10) この全合成体の特権性は部分レヴェルでの指示の二重性との非対称性に現れる。「形而上学」H 3 で，「動物」や「人間」という語が時には「全合成体としての実体 (τὴν σύνθετον οὐσίαν)」即ち「身体における霊魂」を意味表示し，時には或る身体の現実態つまり形相 (ἐνέργεια σώματος) である「霊魂」を意味表示する場合があるとされる。(1043 a 30-35) この二重の指示性は，霊魂の場合には霊魂と霊魂の本質は同じであるが，合成体においては人間と人間の本質は同じではないことに基づく。(cf. VII 6)「或るこれ」という句も同様の二重性を持つ。個物としてのソクラテスを指示する場合もあれば，その本質を指示することもある。(eg. 1042 a 29, 1033 b 21)

(11) 存在の可能態と生成の可能態については，D. Charles, *Aristotle's Philosophy of Action* p.19 ff 1984 参照。

(12) VII 16 冒頭の箇所 (1040 b 5-9) は存在の可能態の理解にとって重要である。ただし分離をめぐる私の理解は従来の理解と異なる。従来動物の部分が全体から「実際に (tätsachlich)」(eg. M. Frede, G. Patzig. p.117) 分離される状況が想定されてきたが，これは説明の上での分離であると解する。従って当該箇所は「動物の諸部分のうちいづれも分離されていることはない。しかし [説明において] 分離されるなら，その時すべての部分は，そして土，火また空気も，質料として存在する」。(1040 b 6-8) となる。その理由としては，(1)事物が「質料として」存在するということは，常に生成レヴェルにおいては全合成体との相関において質料が特定されることからして，実際に切断された部分は何かの質

料として見なされることはないであろう。(2)χωρισθῆ というギリシア語は形相が質料から「ロゴスにおいて離存的である（χωριστόν）」（193 b 4, 1042 a 29）という文脈で用いられるのに対し，数行後の 1040 b 13 において昆虫のように実際に切断された部分が生きることがあるという文脈においては，διαιρούμενα「切断される」というギリシア語が用いられる。(3)部分は全合成体に対し穀粒の集積に比せられるが，「これらの諸部分は，それらが自然により一つであり連続的である限り，ただ可能態において存在している」（1040 b 14）ということがこの節の結論とされている。つまり，実際には分離されては生きることができない部分が，説明において一なる自然物から分離される時，それは形だけ全合成体に似せても穀粒の集積に比されるそのような，可能態においてあるということが確認されている。M. Frede, G. Patzig, *Aristoteles Metaphysik Z* Erster Band, 1988.

(13) J. Ackrill, ibid. p.126. 尚，神埼繁氏はこの心身論のパズルに対し，「魂と身体を形相・質料関係として捉える見方は，実は「魂論」においてはそれ自体としては見いだされない」（p.59, n.9）としてパズルの設定そのものに疑問を提示している。たがパズルが解けるなら，アリストテレス哲学全体のなかで心身関係を論じることができ，パズルの有意味性は残るであろう。神埼繁「「魂の部分」をめぐって ── アリストテレス「デ・アニマ」の構想」「思索」第二八号　1995。

付記　本稿の初期のものは 1995 年 6 月に北大古典研究会で発表された。金山彌平，熊野純彦，田中亨英，田中利光，David Charles，中戸川孝治，納富信留，平田栄夫，松永雄二，三浦洋，山田友幸の諸氏との議論，コメントから稗益するところ多く，記して謝意を表したい。また，学生時代「形而上学」とそのギリシア語注解者の原典講読を通じ御指導下さった牛田徳子先生の学恩に謝意を表したい。